

佐藤通雅・作
飛鳥 童・絵

花子



もえろゆき

佐藤通雅 作・飛鳥 童 絵



牧書店

N. D. C. 913

きとうみちまさ
佐藤通雅

もえるゆき

牧書店 1973 (昭和48) 年

190p. 22cm (児童文庫・1)

基本カード記載例

児童文庫 1

■もえるゆき

*

一九七九年四月五日 第四刷発行

*

■著者 佐藤通雅

■発行者 東 政彦

■発行所 株式会社 アリス館牧新社

東京都千代田区神田錦町三ノ二
電話 (二九三) 九七五五

■印刷所 太陽印刷

■装丁印刷所 プロネット

■製本所 太陽印刷

乱丁・落丁の本は、おとりかえいたします。

この物語は、東北地方の山の中にある、ある温泉町を舞台にしたものです。といっても、もちろん頭の中でこしらえた舞台です。

古くからつたわるこけしを、伝統こけしといいます。その町には、ながいあいだ伝統こけしをつくりつづけている人が、何人かいます。金山吉三さんもそのひとりです。この人は、にぎやかな温泉町をきらって、ずうっと山奥にすんでいる人です。リスが家の中にとびこんだり、キツネが庭に遊びにきたり、ときにはクマまでやってくるのですから、そうとうな山奥です。吉三さんは、なぜ町にひっこそうとしないのでしょうか。そして、この金山吉三さんとは、いったいどういう人なのでしょう。まず、物語をはじめることにはしましょう。



もくじ

第一章 金山吉三さん かなやまきちぞう 5

第二章 みずえ 23

第三章 海とみずえ 59

第四章 なのはなのうた 92

第五章 月夜のししおどり

117

第六章 ゆきと白うま 142



第七章

きえたほし

157

第八章

さようなら、
すすき山

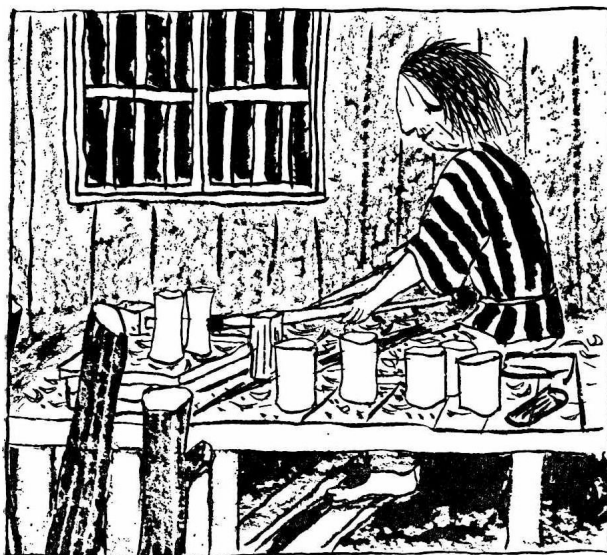
181

あとがき／
188



第二章

金山吉三さん



東北本線のとある駅^{えき}から、支線^{しせん}にのりかえ
て一時間半もいくと、金山^{かなやま}という温泉町^{おんせん}につ
きます。

そこには、今でも蒸気機関車^{じょうききかんしゃ}が走っていま
す。ひろい水田地帯^{ちたい}をすぎると、だんだんと
山がせまってきて、機関車^{きかんしゃ}は、まるで両^{りょう}がわ
のすすきをかきわけるようにしてすすむので
す。トンネルもいっぱいあります。ありった
けの蒸気^{じょうき}をはきだしてやっとぬけたかと思う
と、また、つぎのトンネルがまちかまえてい
るというぐあいです。

こうして、いくつもトンネルをぬけたあ
と、とつぜんいおうのにおいがして、気がつ
いたときには、目のまえにあかるい温泉町^{おんせん}が

ひらけているのです。ここが、こけしの産地として名だかい金山です。

駅を一步でると、赤、緑、黒でいろどられたたくさんのこけしが、どの店にもならべられ、まるで花のさいたようなあかるさです。ところどころの店さきには、木地師のすがたを見ることが出来ます。木地師とは、木で、おわんや、おぼんや、こけしをつくる人のことで、今では、こけし工人とよばれることもあります。

その店さきのだれでもかまいません、

「金山吉三さんという人、しりませんか？」

と、きいてみてください。きつと、おなじこたえがかえってくるでしょう。

「カナヤマキチゾウさん？ ああ、きつつあんのことすか。あの人、かわった人だな。まだげんきだども、山の中にひとりぐらしだ。町がにぎやかになって、みんなおりてきたつつのに、きつつあんだけはがんとしておりてこない。……家？ 家は、ほれ、そこを右にまがって坂道をずうつとのぼって、二時間もいくとすすき山がある。その山の下の一けん家だ。金山こけしの本家にあたる、たいした家がらだども、まだ六十にもならないのにすっかりぼけてしまつてなあ……くろうしたのさ。南洋に戦争

にいつて、やつのことで帰^{かえ}ってきたら、こんどは奥^{おく}さんににげられてなあ。のこったのは、おなごわらしひとりだ。まだ小学校にもはいらない、ちっちゃなわらしだった。

ところが、とつぜん、木からおちて死^しんでしまった。ああ、きつつあんのかなしがりようつたらなかった。三日三晩^{ばん}、いや一週間^{しゅうかん}も、めしくわなかったものな。……そんなこんながあつて、ますますぼけたんだべな。今でもなかなか山からでてこない。たまにでてきても、さっぱり人とはなししない。……だども、うでだけはたしかだ。数はすくなくても、きつつあんのつくるこけしはたいしたものだ。金山^{かなやま}では、だれもかなうものはいない。」

「いやあ、たいしたものだ。きつつあんの仕事^{しごと}は、いつ見てもていねいだ。」

門之助^{もんすけ}は吉三^{きちぞう}さんの仕事^{しごと}場^ばにあがりこむと、あいさつもぬきにして、できあがったばかりのこけしを手にとりました。白い木はだに赤^{あか}と緑^{みどり}が、みずみずしいほどにしみこんでいます。金山^{かなやま}こけしは顔がまるく、胴^{どう}のなかほどがほそくなっているのが特色^{とくしよく}

です。もようは、おもに菊の花で、色のこい染料で胴体いっぱいになががれます。そのはなやかさにくらべると、目とまゆは糸のようにほそく、どこかとおくを見ているような感じをあたえます。はなやかで、つつましかで、どこからともなくただよう気品——それが特色といっていいいでしょう。

注意ぶかくこけしを見まわした門之助は、

「なあ、健助。これがほんとうの金山こけしだ。」

と、そばにすわっている息子（むすこ）をふりかえりました。

「ああ。」

「まゆといい、目といい、口といい、みごとだ。生きてるなあ。それに、このふでさばき……。」

「ああ。」

「木だって、いいところつかってる。」

「木の目がきれいだな。」

「おらたちもおんなじようにやってるのに、きつつあんの手になるのは、どこがちが



う。」

「そうだ、おんちゃんのはどこがちがう。」

「とてもまねできない。」

「できない。」

ふたりはためいきまじりに、こけしをもとのところにもどしました。それから始めて、吉三きちぞうさんのほうをむきました。戸があいたとき、おどろいて目をあげた吉三きちぞうさんでしたが、門之助もんのおすけ親子だとわかると、ひげだらけの口もとをほころばせて、そのまふでをはこびつづけています。ふたりがかってにさがりこみ、こけしを手にとってはなしているあいだも、ただ、ニコニコしているだけです。

「どうだ、きつつあん、からだのちょうしは。」

「ああ。」

「どこか、わるいところないか。」

「どこもない。」

「きつつあんは、じょうぶだな。おらなんか、このごろ肩かたがはってな、病院びょういんにいった

ら、神経痛しんけいづうだといわれた。」

「はあ。」

「まんつ、いそがしくてかなわない。」

門之助もんすけはそういいながら、肩かたをさすったり、首をゆっくりまわしたりしました。

「たいへんだな。お茶ちやでもいれるべ。」

吉三きちぞうさんは、はじめてふでをおきました。

「あ、いい、きつつあん、たたなくてもいい。健助けんすけにいれさせるから。」

「おんちゃん、おれやる。」

「お茶ちやよつか、まず、健助けんすけ、おみやげだ。」

「そうだ、そうだ。わすれてた。」

サンダルをつっかけた健助けんすけは、さっそく外にでて、車につんできたものをつぎつぎ

とはこびこみます。

「これは米。これはしょうゆ。やさい、りんご……、さかな……、酒さけ……。」

たちまち、荷物にもつの山です。

「それから——と。」

さいごに健助^{けんすけ}は、紙ぶくろをとりだしてきて、吉三^{きちぞう}さんのまえにおきました。

「これは、おんちゃんのこうぶつのタイヤキだ。」

「いつもいつも、すまねえ。」

まだホカホカしているふくろを見ると、目じりには、くちやくちやとしわがよりました。

「さあ、あったかいうちにたべろじゃ。健助^{けんすけ}、お茶^{ちや}いれてけろ。荷物^{にもつ}は台所^{だいどころ}にはこんでおけ。ついでにそうじしておけよ。」

「ああ、いまやるから。」

「すまねえな、健^{けん}ぼう。」

台所^{だいどころ}にいく健助^{けんすけ}に声をかけると、

「健^{けん}ぼうっていいかた、やめろじゃ。おんちゃん、おら、もう二十七だぞ。」
と、ふりむきました。

「あは、あは、あは、そうだったな。あは、あは。」

きちぞう

吉三さんは、しらが頭をかきあげてわらいました。それから、またえ顔にもどり、タイヤキのしりっぽをかじりはじめました。そして、だれにもきこえないようにつぶやくのです。

(みずえも生きていれば二十七だ。)

「ところで、きつつあん、いつまでもこんな山の中にいないで、町におりてこいじや。おら家^えにきたっていいんだ。えんりよはいらねえ、ちゃんとへやは用意^{ようい}してある。ひとりでいたいなら、べつにはなれをつくってもいい。だいたい、タヌキだのキツネだのでるところは、人間の住^すむところでない。」

「キツネなら、けさ、庭にすわっていた。」

「キツネならまだいい。冬になればクマがでるべえ。それに、今はじょうぶでも、きつつあんも年が年だ。いつ、どうなるかわからない。」

「うん、うん。」

「まったく、親方^{おやかた}もがんこだったが、きつつあんもそうとうなものだ。へんじだけはいいが、さっぱり腰^{こし}をあげようとしなないおな。」

吉三^{きちぞう}さんは、タイヤキを一つたべおわって、あいかわらずニコニコしながら、茶^{ちや}をすすりました。

「だいたい、金山^{かなやまけ}家^けといえば、この金山^{かなやま}の木地師^{きじし}の先祖^{せんぞ}だ。その血^ちをひくのは、今では、きつつあんただひとりだ。おれは、親方^{おやかた}に弟子^{でし}いりして、やっとひとりだちできるようになったども、それもみんな、親方^{おやかた}のおかげだ。」

「おやじは、門^{もん}さんにつらくあたったべえ。」

「そんなことない、そんなことない。親方^{おやかた}はえらいところあった。」

「門^{もん}さん、いつもおこられたなあ。おらだっても、息子^{むすこ}だからってようしやはしないといわれて、よくおこられた。」

「そうだ、いつもふたりでよくおこられた。ははあ。おれにはそれがうれしかった。」
「ふたりとも、兄弟^{きょうだい}みたいだったなあ。」

「おこられるときも、ほめられるときも、いっしょだった。……そのきつつあんがよ、いつまでもこんな山^{さん}中^{ちゆう}にいるなんて、おれにはがまんできない。だいたい、こ^こちが本家^{ほんけ}だしたら、おらどこは分家^{ぶんけ}だべ。その分家^{ぶんけ}が、本家^{ほんけ}をさしおいて町^{まち}に大